

20世紀初期イングランドの労働者の生活

—— 2編の伝記による都市と農村の事例 ——

原 剛

1. 序 論

ある国のある時期の労働者の生活状態を一般化するためには、平均値と指数に依拠せざるをえない。たとえばイングランド全体の農業労働者の賃金の19世紀末から20世紀初期にかけての動向について言えば、1898年に16シリング9ペンスだったのが、1902年に17シリング5ペンス、1907年には17シリング7ペンスと上昇した(表1)。1898年から1907年までに約4%の上昇である。他方、同じ期間の生活費の上昇は2%だったので⁽¹⁾、実質賃金は上昇した。しかし1913年の貨幣賃金を100とすると、1917年には139で、39%上昇したが、その間に物価は73%上昇したので、実質賃金は低下した(表2)。表2にある稼得は、超過時間勤務や現物給与の増加によって、貨幣賃金よりやや上昇率が高いが、農業労働者の場合には、超過勤務や現物給与の追加の余地はなかったので、1918年頃の農業労働者の実質賃金は1914年の60%強に低下したであろうと考えられている⁽²⁾。この間、1917年にThe Corn Production Actによって、小麦価格を政

表1 農業労働者の賃金の変化 1898~1907年

1898年	1902年	1907年
16 s. 9 d.	17 s. 5 d.	17 s. 7 d.

Source: Board of Trade of Official Report on Wages (Cd. 5, 460) p. x iv

表2 全産業労働者の実質賃金の変化 1913~1917年 (1913年=100)

	1913年	1915年	1917年
平均貨幣週賃金率	100	108	139
平均週稼得	100	117	170
小売物価	100	121	173

出典 Peter Dewey, War and Progress Britain 1914~1945, p. 41

府が保証する代償に、政府は Agricultural Wages Board によって、農場経営者に最低賃金を支払う義務を負わせた。これによって、農場労働者の賃金は約 95% 増加して、1921 年には 37 シリングとなった。しかし 1921 年に Corn Production Act が廃止されると、農業労働の賃金裁定は、各州の民間の委員会に委ねられ、賃金は 1922 年に 28 シリングへと低下した⁽⁴⁾。

他方、都市労働者の賃金についてみると、ロンドンの人々の生活状態を Charles Booth が調査した 1886 年と、その 40 年後の 1928 年に LSE がロンドンの人々の生活状態を調査した結果とを比較すると、ロンドンの労働者の週あたりの稼得は、平均して 116% 以上増加したのに対して、衣食住の生活必需品の価格の上昇は 80~87% にとどまったので、この時期にロンドンの労働者の生活の物質的条件は、数字の証拠によると改善された⁽⁴⁾。

しかし 1900 年から 1934 年の期間について、5 年平均でイングランドとウェールズ全体の全産業の筋肉労働者の週あたりの稼得と生計費の変化とを見ると、表 3 のとおりである。

表 3 に見られるとおり、20 世紀に入ってから第一次世界大戦が始まるまで、労働者の生活水準はほとんど変わらず、わずかに低下さえした。戦時中にはかなり低下したが、戦争後に上昇に転じた。1920 年から 1924 年の 5 年間はとくに貨幣賃金の上昇率のほうが物価の上昇率よりかなり高く、また 1925 年から 1929 年の不況期には貨幣賃金が低下したが、その低下率よりも物価の低下のほうが大きかったので実質賃金と生活水準の上昇が著しかった。

ところで大戦後にそのような生活水準の上昇を安定して享受できたのは、全産業の労働者ではなかった。それを享受できたのは、輸出に依存する程度が少なかった新産業—自動車、電力・電器、化学、航空機、ゴム、アルミニウム、食品加工等—で働く労働者であった。輸出に大きく依存してきた旧来の基幹産業—木綿、石炭、鉄鋼、機械、造船—に従事した労働者は、断続的あるいは長期的失業の憂き目にあつたために、それを十分に享受することができなかつたのである。

表 3 労働者の週あたり稼得と生計費の 5 年平均の変化 (1930 年=100)

	週間稼得	生計費	稼得/生計費
1900~04 年	48	58.02	0.83
1905~09	48.4	59.56	0.81
1900~14	50.8	63.03	0.80
1915~19	82.2	111.12	0.74
1920~24	120	128.1	0.93
1925~29	102	107.48	0.94
1930~34	97.8	112.22	0.87

出所 Halsey (ed), *Trends in British Society since 1900*, pp. 121 & 122

「戦間期には工業に関するかぎり、二つのイングランドがあった。一つは不況と『dole（失業お恵み金）』のイングランドで、もう一つは、景気がよく雇用が安定しているイングランドだった」⁽⁵⁾。二つのイングランドといえば、農業労働に関しても、19世紀半ばに James Caird がその存在を実証してから⁽⁶⁾、20世紀に入っても存続し、その状況は変わりなかった。たとえばイングランド南部のオックスフォードシャーでは、農業労働者の平均賃金は週あたり14シリング11ペンスであり、北部のダラムでは21シリング6ペンスだったのである。

ところで、我々がこのような指数と平均値によって知る労働者の生活は、いわば計算上の観念的な生活である。現実の生活は、それを体験したり目撃したりした人しか語ることはできない。過去の労働者の生活の実態は、その当時の記録の中にあるばかりでなく、その生活を体験した人の記憶の中にもある。1912年と1913年にラウントリー Rowntree はメイ May と協力してイングランド北部と南部の42の農業労働者の家族の家計を面接調査した⁽⁷⁾。その記録はかなり明らかに生き生きと当時の農民の生活を伝えるが、1899年にイングランドのウルトシャーの農村に生まれた女性ウイニフレッド・グレイス Winifred Grace（旧姓 スペンサー Spencer）のそこで過ごした幼少の十数年の生活とその後の女中としての生活を、彼女の記憶と口述に基づいてシルヴィア・マーロウ Sylvia Marlow が著した伝記はもっと詳しくその生活を伝える。同様に1916年にイングランド北部のランカシャの工業都市ブラックバーンに生まれてそこで十数年を過ごした歴史家のウイリアム・ウッドラフ William Woodruff による物語的な自伝も、この時期のその地域の生活をありありと伝えるものである⁽⁸⁾。両方の物語のヒロインとヒーローが過ごした幼・少年期と思春期は、第一次世界大戦の前と後という差があるが、この両者は労働者階級の家族の一員として、20世紀初期イングランドに生きた人たちである。そして、ウルトシャーの農村は当時のイングランドの農業社会で賃金の低い方のイングランドに属し、ランカシャのブラックバーンはイングランドの工業地帯のなかで、不景気なイングランドに属していた。したがってこの二つの伝記に書かれている家族の生活は、20世紀初期イングランドにおける農業と工業の社会の底辺にいた人々の生活であると言ってもよいであろう。本稿はその二つの物語をとおして、20世紀第1四半期にイングランド社会の底辺に生きた農業労働者の家族と工業労働者の家族の生活を具体的に示そうとするものである。

2. 伝記の主人公の周囲の人口

1901年のセンサスによると、ウイニフレッドが育った村の近くのエンフォード町の戸数は161戸、人口は674人とある。彼女が14歳まで育ったクーム・ベイク村の戸数は分からないが、彼女の家は野中の一軒屋だったが、近くに家があったとも言っている。おそらく小集落だったので

あろう。北方にはマールバラ、南方にはソールズベリ、西方にはディヴァイジズという地方都市が20～30キロ離れたところにあった⁽⁹⁾。

同じく1901年センサスによると、ウィリアム・ウッドラフが生まれ育った綿業都市ブラックバーンの戸数は2万7,429戸、人口は12万7,626人だった。そして10歳以上の男女で木綿工業に従事した人は、約4万6,000人の男性中の30.3%であり、約5万5,000人の女性中の27.4%であった⁽¹⁰⁾。ウッドラフが育ったグリフィン・ストリートについて見ると、1891年のセンサスによれば、14歳以上の男性201人中の93人(46.2%)、女性206人中の127人(61.6%)が綿業労働者だった。ちなみに13歳以下の男子は77人、女子は80人だった⁽¹¹⁾。

3. ウィニフレッドの家族とウィリアム・ウッドラフ(通称ビリー)の家族の家計

(1) 収入

(a) ウィニフレッドの家族の収入

ウィニフレッドの父は牛飼いで、週当たりの賃金は10シリングだった。その農場は借地農場経営者のものではなく、地主が経営する農場であった。彼の仕事は牛舎での牛の世話と牛の放牧であり、また子牛を肥育することと、成長した牛を家畜市で売ることとも彼の責任であった。彼はこの仕事のために、日曜も休むことができなかった。イングランド南部の農業労働賃金は北部より低く、とりわけウILTシャーやドーセットシャーは低かったが、それにしても低い貨幣賃金である。しかも家畜を扱う労働者の賃金は平均より高いのが普通だったから、この賃金は低い。ただし牛飼いの仕事には農閑期の失業がなく、一年を通じて雇用が安定していたという利点はあったであろう。

ウィニフレッドは「収入と言えば、父の10シリングだけだった」と述べているが、一家の現金収入はそれだけではなく、父には副収入があった。副収入の主なもの、罌で捕らえたウサギやモグラの皮を、ロンドンの労働者街にある商店に売って得る小遣い銭であり、それは彼の飲み代となった。そのほかにも、牛飼いの臨時の仕事をして報酬を得ることがあったらしい。しかし上記の小動物の皮の売却代金も、臨時収入もいくらだったのかは分からない。

ウィニフレッドの母には、農業労働者の妻として当然に行なわなければならない無償の労働があった。たとえばミルク搾りのような仕事それがそれである。しかしそのほかにも、農場経営者の地主の命令で、その屋敷に行って臨時の労働に従事すると、日給として半シリングを与えられた。そのような臨時の仕事が1年に何日あったのかも分からない。また秋の初めにウサギやキジの狩猟会があり、その後で開かれるパーティー会場となる小屋を管理する報酬として、1週に1シリングもらったとあるが、それが1週だけのことか、何週間にもわたって与えられたのか、あるいは

通年だったのか分からない。さらにウイニフレッドの母はミツバチを飼い、蜂蜜と蜜蝋を都市に売りに行ったとあるので、それによってもいくばくかの現金収入を得たであろう。

さらに子供は、収穫期に小学校を休んで農場の取り入れを手伝って半シリングを報酬としえ与えられ、また学校が休みの日に、地主の屋敷に通じる道路に敷き詰める小石をバケツに何倍も拾い集めて半シリングもらった。

これらの現金収入の総計が年間にいくらになったのかは分からない。しかしそれは非常に僅少だったので、家族は、ウイニフレッドが述べたとおりに、「お金の貯えなど、できっこない」という心理状態で生活していたのかもしれない。しかし実際にお金の蓄えが1ペニーもなかったかどうかは疑問である。たとえばウイニフレッドの姉たちが12歳と13歳で、またウイニフレッドが14歳で、女中奉公に出たとき、娘の親が自弁で支度する慣習とされていたエプロンや服やコート代金6ポンドは、蓄えがなければ調達することができなかったであろう。しかしそうは言っても、次に述べるウッドラフの自伝の記述と比べると、ウイニフレッドの家族がいろいろな労働に対して得た報酬は総じて非常に低い。1906年頃にロンドンのドックで働く不熟練労働者の日給が5シリングであったのと比べても、それは非常に低かったことは確かである。それでもウイニフレッドの家族が生活できたのは、いわば現物給与があって、現金収入がなくても生活できる条件があったからである。

その種の現物給与としてまず挙げなければならないのは、住居であろう。彼らは地主が所有する家屋に無料で住ませてもらった。また保有する菜園の半分で野菜とジャガイモを栽培し、残りの半分で自家で飼う豚の飼料を栽培した。豚のえさには、少し離れた町のビール工場から無料でもらう麦の搾りかすも使われた。干し草刈りの後の刈り残された牧草も豚の飼料とされた。おそらく豚は通常行なわれていたように、毎年2頭ないし3頭肥育され、育った豚は毎年1頭か2頭つぶされ、家族が食べる1年間の豚肉に当てられた。残りの1頭は売却され、その代金で翌年のために新しい子豚が2頭か3頭購入された。ヤギも飼って、そのヤギからミルクを得た。豚とヤギを飼うことを雇い主が許してくれたのは、ウイニフレッドの家族にとって幸いだった。というのは、農場経営者のなかには、豚などのえさにするために労働者が大麦などの作物を盗むことをおそれて、労働者が家畜を飼うのを禁止する者がいたからである⁽¹²⁾。鶏も飼っており、主な餌はトウモロコシの粉だったらしい。地主の畑のトウモロコシの収穫の後、畑に落ちている粒を拾い集め、また脱穀作業のとき、作業終了後も運転係の労働者が機械を動かし続けて機械に残っていたトウモロコシを袋に受けさせてくれたものを、粉挽き小屋にもって行って挽いてもらった。飼っていた鶏の肉と卵は、自家用に供されたばかりではなかったであろう。野鳥の小鳥の肉や卵も自然の恵みであり、また土曜日ごとに森で一年分の薪を拾うのは子供の仕事であった。

要するにウイニフレッドの家族は、必要なものを可能なかぎり現金で調達せずに、周囲の環境

を利用し尽くして生活していたのである。

(b) ウィリアム・ウッドラフ（通称ビリー）の家族の収入

ビリーの父は木綿工場の熟練工で、賃金は週あたり 25～30 シリングであった。さらに木綿工業都市では女性の雇用が普通であり、主婦も工場で就業すれば少なくとも週あたり 15 シリングの収入があり、娘たちが 13 歳か 14 歳で工場で就業すれば 5～10 シリングの収入を得ることができた。ウッドラフ家では、父親が第一次世界大戦から帰還した戦後に、織布工の賃金は戦前の水準に据え置かれたので実質賃金は低下したが、戦後にときどき訪れた木綿工業の短期間の好況時に家族全員が就業すると、家族の収入は 50 ないし 55 シリングに達したであろう。もっとも 1909/11 年と 1919/21 年の各々の 3 年間の物価指数の平均は、この間に物価が 2.4 倍に上昇したことを示すから⁽¹⁴⁾、1920 年前後の 55 シリングの家族収入の価値は、1910 年の 24 シリングと大差なかったかもしれない。エンゲル係数は非常に高かったにちがいない。ビリーが自分の家族は「心理的にはいつも空腹状態だった」と述べているのはそのことを表している。

ビリーは 6 歳になると近所の食料品店で、学校の放課後と土曜日の午後に配達小僧のアルバイトをして、週に 1.5 シリングを稼いだ。賃金は親に渡され、親はそのうちの 1 ペニーをビリーに与えた。ビリーは 10 歳になると、そのアルバイトに加えて新聞販売店に雇われ、朝刊と夕刊を配達して週に 2.5 シリングを得た。合計 4 シリングである。さらに義務教育を終えて 14 歳で食料品店に雇われると、週給 10 シリングを得た。ウッドラフの家族の収入は子供たちが幼いときには 35 ないし 45 シリングで、子供が稼ぐようになり、母も就業していれば 55 ないし 65 シリングになった。そのような多い家族収入があったので、短期間ではあったが、彼らは労働者街から山の手の住宅地への脱出ができたのであろう。

都市の生活では、農村のように自然の恵みとして無料で食料を得る機会はほとんど無かった。無料で食料を得たとすれば、キリスト教会の礼拝の後で参会者に供与されたお茶とクッキーと、町の広場に立つ市で、露店のくず箱からかすめ取った疵ものの果物などであった。また燃料の補助として、子供たちは工場のゴミ捨て場から石炭の燃え殻を拾い集め、それを使って冬の夜に夜通し暖炉の火を絶やさないようにした。

(2) 支 出

(a) ウィニフレッドの家族の支出

伝記に家計簿は記載されていないから、家族の支出の全体を知ることはできない。そこで先に挙げたラウントリーとメイの調査の中にある農業労働者の家族で、ウィニフレッドの家族と類似の条件の家族の 1912 年 11 月のある 1 週間の家計を参考にして、ウィニフレッドの家族の支出状

態を推測してみる（表4）。

この家族には子供が3人おり、ウイニフレッドの少女時代に家にいた子供は2人だったから、ほぼ似たような家族構成である。したがってこの家族の支出はウイニフレッドの家族の支出に似ていたと考えてよいであろう。しかしこの家族が払っていた家賃、および食肉とラードとミルクと干し葡萄を、ウイニフレッドの家族は支払わないですんだから、ウイニフレッドの家族の支出は、この家族の支出より約4シリング少なかったであろう。したがってウイニフレッドの父親の賃金が表4の夫の賃金より3シリング少なくても、同程度の消費生活は可能だったことになる。

ウイニフレッドの記憶によれば、野中の一軒家だった彼女の家を訪れる人は「パン屋と郵便配達夫くらいのものであった」。農村にいながらウイニフレッドの家族は、南部農村の多くの農業労働者の家族がそうであったように、パンをパン屋から購入した。1820年代の救貧行政では、夫婦が食べるパンは週に28ないし32重量ポンド、1人の子供が食べるパンは6ポンドとされた⁽¹⁴⁾。したがって家に残っている子供が2人のとき、家族全員のパンの消費量は40ポンドないし44ポンドとなり、代金は4.6ないし5シリングとなる。表4の家族のパンの消費量は、これに比して非常に少ない。おそらく菜園でとれたジャガイモで補ったのであろう。ウイニフレッドの家族も

表4 オックスフォードシャーのある農業労働者の家族の生活
[家族構成:夫婦と男児(6歳)1名と女兒(8歳と3歳)2名]

家族の週当たり総収入		1912年の普通の週の支出					
費目	s. d.	費目	s.	d.	費目	s.	d.
夫の賃金	13 0	小麦粉 5.25 lb.(約 2.4 kg)	0	8	牛の脂肉 0.5 lb.(約 0.2 kg)	0	3
妻の賃金	0 4.5	パン 26 lb. (約 11.8 kg)	3	0	新鮮ミルク 3 pint(約 1.7)	0	4.5
	13 4.5	牛の内蔵 3 lb. (約 1.3 kg)	1	6	燻製ニシン 4尾		0 3
		干し葡萄 0.75 lb.(約 0.4 kg)	0	3	家賃(3部屋)		1 3
		ラード 0.5 lb. (約 0.2 kg)	0	3.5	油とローソク		0 3.5
		茶 0.5 lb. (約 0.2 kg)	0	9	石炭 1.5 cwt. (約 76 kg)		1 10.5
		砂糖 5 lb. (約 2.2 kg)	0	10	保険		0 3
		バター 1 lb. (約 0.5 kg)	1	3			13 1
					衣類のための残額		0 3.5
							13 4.5
年間の臨時収入	£ 3				割り当て小農地(年間地代)	£ 1	10s.
		消費された自家製品					
		ジャガイモ 16 kg, 芽キャベツ 1.3 kg, カブ 1.3 kg, パーソニック 1.3 kg, タマネギ 0.1 kg					
		もらいもの ベーコン 0.45 kg					

それだけのパンを買うことは不可能で、菜園で作ったジャガイモで補ったにちがいない。ウイニフレッドの伝記に定期的な支出として明記されているのは、牧師の家で開かれる「母の会」で、買い物のために毎月1回積み立てる2シリングである。積み立て金には利子をつけられ、母の会に欠席したときには、後で牧師が訪問して積み立て金を集めたとあるから、牧師の善意で管理・運営されていたのかもしれない。1年間積み立てた金は、近隣の都市での大きな買い物に使われた。

1年間にまとめて1回支払われたものに、菜園として使われた割り当て小農地の地代があったかもしれない。ウイニフレッドは家賃は無料だったと述べているが、菜園の地代については何も述べていない。もしウイニフレッドの父が払った割り当て小農地の地代が表4の家族と同じで、年間に30シリングだったとすると、週あたりでは7.5ペンスとなる。

このほかに自給できない衣類や塩やローソクや灯油や茶や砂糖などを買わなければならず、小学校の教科書、週市への買い物について行った子供たちに与える1ペニーのお小遣いが必要だった。これらを捻出するのは容易ではなかったであろう。ウイニフレッドの母が祖母から受け継いだ彫刻のある蓋つきの木製の毛布入れの櫃を手放すことになったのは、この家計のやり繰りの困難を物語っている。

ウイニフレッドの家族は最小限の必需品を購入すれば残金はほとんどない生活を送っていた。

(b) ウイリアム・ウッドラフの家族の支出

ウイリアム・ウッドラフの自伝においても、ウイニフレッドの伝記と同様に、現金の支出に関する記述は多くない。ウッドラフ家は両親と子供4人の6人家族である。ウイニフレッドの家族について試みたように、ビリーの家族と類似の条件の都市労働者の家計を参考にして、支出の型を類推してみる。この例としては、リーヴズ夫人 Pember Reeves が示したロンドンの6人家族の鮮魚商の店員の、1910年3月の支出を挙げることにする。彼の賃金は週あたり24シリングだった。その支出を食費とその他とに分けると表5のようになる。家賃と食料費が賃金収入の75%を占めている。

ヒリーの父の賃金は週あたり25~30シリングであった。したがって1910年頃に稼ぎ手が父一人であっても、彼らの家族はこの表と同等の支出をしたであろう。ウッドラフ家の支出が上記の二家族の支出と異なった点の一つは、ウッドラフ家が小麦粉を買ってパンを焼き、上記の家族はパンを買ったことである。一般にイングランド北部では、農業でも工業でも労働者は自家でパンを焼き、イングランド南部では、農村に住む農業労働者でもパン屋からパンを買った⁽¹⁷⁾。小麦粉とオートミールにどれほどの金が支出されたかは不明だが、夫婦が32重量ポンド、子供が24重量ポンドの小麦粉をパンの材料としたとすれば、最大で6シリング4ペンスを費やしたであろう。

表5 ロンドンの鮮魚商の店員の家族の週当たりの支出（1910年3月）

食費以外の支出			食費の支出		
費目	s.	d.	費目	s.	d.
家賃（広いが地下室の湿った2部屋）	5	6	パン 10 loaf	2	3.5
保険	0	7	肉	5	2
石炭 1.75 cwt(約 89 kg)	2	3	ジャガイモ	0	6
ガス	1	0	野菜	0	4
糊, 石鹼, ソーダ	0	5	バターとジャム 各 1 lb. (約 450 g)	1	3.5
薪	0	1	茶 8 oz. (約 227 g)	0	8
新聞	0	1	新鮮ミルク 6.5 pint (約 3.7)	1	1
	9	11	砂糖 2.5 lb. (約 1.2 kg)	0	5.25
			小麦粉 0.5 qrtn. (約 1 kg)	0	2.75
			ベーコン	0	6
			干し葡萄	0	1.5
				12	7.5

出典：Pember Reeves, Family Life on A Pound A Week, Fabian Tract No. 162 (1912) pp. 11-2

このようにウッドラフ家の支出についても憶測するほかないが、主要な支出のなかではっきり記されているものがある。それは普通の労働者住宅の家賃であって、1週間に3.5シリングであり、集金人が毎週集めて回った。食料品の多くを近所の店で掛けて買い、週末に清算したが、家賃を滞りなく払っていることを示す家賃帳が、その店で掛けて買う信用を得る保証となった。そのほかに価格が明記されている事例を挙げると、食品では、安物の魚が、1週間毎日食べても1人分0.5シリング、中国からの輸入卵が1個0.4ペンス、パブのビールがジョッキ1杯4ペンス、アメリカから来た客のために張り込んで買ったワインが1瓶2シリング、タバコが5本で2ペンス、木靴（上部は革で底が木の靴）の修理代は、靴底の芯が8ペンス、踵が4ペンス、つま先が2ペンス、引っ越しに使った荷車のレンタル料金が1晩1シリング、山の手の一戸建の家に備えた家具一式のレンタル料金が1週間に数シリング、ペニー朗読の1ペニー、葬儀費用の積み立て金が毎週1ペンス等々である。水道料金は無料だったが、ガスライトの照明は、1回分が1ペニーだった。その1回分の時間がどれほどだったかは、分からない。主要な支出費目である小麦粉や石炭の代金や、肉、野菜、紅茶、スキム・ミルク、マーガリン、塩、砂糖等の代金は明記されていない。また毎朝、窓をたたいて目ざましをして回る人への謝礼や労働組合費、同じ町内の人たちが馬車に乗って郊外へ行った遠足の参加費も分からない。分かることは、当然のことだが、都市に住んだビリーの家族は、農村のウイニフレッドの家族より現金を支出する機会と金額が倍以上だっ

たことである。

4. 食事の内容

(1) ウイニフレッドの家族の食事

「鶏を飼っていたから、朝にはときどき卵が出ました。豚がいたので、父のお弁当にはベーコン・サンドイッチがありました。夕食には、よくシチューやパイが出ました。ウサギ肉やミヤマガラスのパイです。若いミヤマガラスは簡単に打ち落とせましたから、その胸肉にちょっとベーコンを加えると豪華な夕食です。ときどきは鳩やスズメのパイも食べました。」小さな野鳥を食べるのは、イングランド南部農村では普通のことだった⁽¹⁶⁾。「父は畑で野菜を育てる。母はその野菜と一緒に煮る肉を八方手をつくして調達する。両親はそういうふうには仕事を分担して、私たちに食べ物を与えたのでした。」

(2) ビリーの家族の食事

木綿工業が好況のときの朝食のメニューは、お椀に山盛りのオートミール、マーガリンかラードかジャムか糖蜜をつけた厚切りのパン、夕食の残りのタラや燻製のニシン、スキム・ミルクに紅茶だった。昼食は工場食べる弁当だが、これもたっぷりとヴォリュームのあるもので、内容は肉とジャガイモと野菜シチューだった。シチューは茶色の陶器に入れて大きなストーヴの上で温めておいたものを食べた。夕食はシチューの残り、オートミール、フィッシュ・アンド・チップス、煮るか焼くかしたタラ、冷たいソーセージ、冷たい牛モツ、チーズ、ピクルスなど、雑多だった。日曜日は特別で、朝食にロースト・ビーフからムの肩肉またはスネ肉、キャベツ、いろいろな豆、カリフラワー、プリン、果物、ハッカ入りケーキ、寒い冬の夜には肉団子の入ったスープを食べた。

このような記述をみると、ビリーの家族はウイニフレッドの家族より豊かな献立の食事を楽しんでいたことは確かである。しかしそれは木綿工業の景気がよい時のことであった。1920年代半ばから1930年代半ばにかけての不況期には、彼らの食卓に肉はなく、もっぱらピクルスと中国から輸入された黄身のうすい安い卵を食べた。一家全員が解雇され、週に15シリングの国民保健からの失業手当の給付が15週間で打ち切られ、労働組合からの失業手当の給付もその後打ち切られると、僅かな家財を売った後に、景気が回復するまで一家が餓死しないためには、市当局が配布する貧民救済の救恤物資と教会や慈善団体による無料食堂とに依存するほかなかった。市の救恤物資の袋には「粗悪な大きなパンが2個、コーン・ビーフの缶詰が数個、紅茶1袋、砂糖1ポンド、コンデンスミルクの缶詰1個、チーズ少々、ベーコン1本、フェルトのくず

が入ったマーガリン少々、シロップとソース1瓶ずつ、塩少々」が入っていた。

このように工業の不況によって生活が突然に著しく貧窮することは、ウイニフレッドの生活では経験されなかった。ビリーが自分の家族は「心理的にいつも空腹状態だった」と感じたのは無理もないことであった。「豊かになればなるほどたくさん食べた。景気のよかったとき、つまり1920年代の初めにランカシャの繊維工業の底が抜けるまでは、たぶんお金はみんな食べ物につき込まれたと思う」とビリーは言う。じつにエンゲル係数の高い生活であった。

5. 住居と家具

(a) ウイニフレッドの家族の住居と家具

ウイニフレッドの家族が借りていた家屋は石造りで、屋根はスレート葺き、間取りは2階に寝室が三つ、1階に居間とキッチンだった。2階の床は板張りで、古い布切れを編んで作ったラグ・ラグが敷いてあった。

ウイニフレッドの両親の寝室には整理ダンスと洗面台のほかに、黒いエナメル塗りのベッドと毛布入れの櫃があり、その蓋にはばらの花が彫刻してあった。整理ダンスの上に聖書と小さい陶器の紳士と淑女の人形がのっていた。ベッドの両脇には、籐で編んだ小さいテーブルがおいてあった。ウイニフレッドの母が行商人から買ったものである。他の寝室にそれぞれベッドがあったのは当然である。1階の居間の床にはヤシの繊維を編んだマットが敷いてあった。さらにテーブルが三つあり、そのうちの大きな四角いテーブルは食卓で、椅子が6脚据えてあった。小さいテーブルにはテーブル・クロスが、もう一つのテーブルには花瓶が置いてあった。壁には父が市で買った金色の額縁に入った油絵が二つかかっていた。

キッチンには銅製の釜、石炭を焚く炉、置き台つきのグリルがあった。炉では石炭でなく薪が大いに使われたと思われる。明かりは石油ランプとロウソクを使った。水は井戸水を使った。しかし上記の家具のうちのどこまでが小屋に備え付けのものだったのかは不明である。

(b) ビリーの家族の住居と家具

ブラックバーンの工場労働者の住宅は2階建てのレンガ造りの長屋で、屋根は灰色のスレートで葺いてあった。間取りは2階に寝室が2室、1階に居間とキッチンの4部屋で、各々の部屋の広さは四畳半から六畳程度の狭いものであった。2階の床は板張りだったが、1階の床は四角い砂岩を敷き詰めた上に、砂を敷き詰めてあった。表の入り口のドアを開ければ、そこは馬車が通行する通りで、小さい丸石で舗装された狭い裏庭は一世帯ごとに周囲を塀で囲まれ、差しかけ小屋の物置と、水洗ではないが下水の本管に接続する便所とその隣にごみ箱があった。ごみ箱の口

は塀の外にも開いていて、ごみは馬車で収集された。

労働者街から山の手の大きな家に引っ越したときに車で運んだ家財道具は、ベッド三つ、寝具、揺り椅子4脚、スツール4脚、椅子1個、ベンチ1個、テーブル1個、オレンジの空き箱数箱、小便壺、数枚のペッグ・ラッグ、鍋、食器類、バッグに入れた銘々の持ち物であった。ウイリアムがもっと幼かったときには、両親が一時のアメリカ移住から帰国したときに持ち帰ったカットグラスのパンチ・ボールとミシンがあったが、それは不況期の失業中に売却されたと思われる。

台所のオーブンと石炭炉は住宅の備品だったであろうが、裏庭の物置にあった洗濯物の絞り機が個人のものか住宅の備品かは分からない。

6. 教育と娯楽

(a) ウイニフレッドの学校と娯楽

ウイニフレッドが7歳から通った小学校には2人の年配の女性の先生がいた。学校は家から3マイル離れた町の学校だった。教科書は1学年に1冊ずつあり、その1冊にすべての教科が含まれていたと思われる。5年生の教科書の地理の項目で、生徒たちは英国の州を一つずつ割り当てられて、その州について発表させられたとある。1週間かけて本を読み、レポートを書いたり、テーマを与えられて1週間後に作文を書いたりする課題も出された。算数の時間には黒板に出て計算させられ、6年になると就職のための正式の手紙の書き方を教わった。かなり良質な初等教育であった。14歳まで小学校で学ぶことを許されたのは、家族の中でウイニフレッドだけであり、彼女の姉たちは12歳か13歳で学校をやめて奉公に出された。

ウイニフレッドの伝記に記されている娯楽は非常に少ない。父は罾にかかったモグラやウサギの皮の代金が手に入ると近くの町のホテルの酒場で酒を飲むことが金のかかる唯一の娯楽であった。しかし罾を仕掛けて小動物を捕らえることは、実利を伴う娯楽であったかもしれない。罾の獲物の代金で一月に何回ぐらい酒場に行けたのか分からないが、その回数はあまり多くはなかったように思われる。ウイニフレッドの母の娯楽は何も記されていないが、1か月に一度の「母の会」と、夏の隔週の土曜日に近隣の町でする買い物と、1年に一度のもっと大きな町での買い物だったであろう。それからクリスマスの翌日のボクシング・デイに3マイル離れた雇い主の屋敷で労働者たちのパーティーが開かれる前に、立ち寄った仲間の人々に手製の果実酒やビールを振る舞い、歌を歌い踊りを踊る人々をもてなしたのは、ウイニフレッドの母の楽しみの一つだったかもしれない。その後で雇い主の屋敷で開かれたパーティーも娯楽であったにちがいない。

農村では子供も働かなければならなかった。「幼いときから、私たちは親を助けて働きました」「遊びに出してもらったことなんか一度もありません」。夏には農場の田野を歩き回って鳥の巣を

さがして卵を集めた。卵は食用にもなり売り物にもなった。だからそれは遊びではなかったが、ウイフレッドが言ったように「おもしろくないわけはなかった」のである。夏の隔週の土曜日にモールバラの週市に買い物にいった帰途に、ウイフレッドと弟は、めいめいがもらった1ペニーで買ったレモネードと干しブドウ入りの甘みのある小さな丸パンを森の中で食べた。それも娯楽の一つだったであろう。近くの町のクラウン・ホテルで客のためにウサギ追いの賭けごとが行なわれ、ウイフレッドはその賭けに参加してよく儲けたので母親に告げ口されて禁止された。ということは、近所の人たちもその賭けに参加していたのであろう。

ウイフレッドの初めての女中奉公では、休暇は1か月に一度で、その日をどのようにして過ごしたのか分からない。次の雇い主のもとでの女中奉公では、毎週木曜と隔週の日曜日の午後には3マイル離れた町で見世物を見物したり、喫茶店でおしゃべりしたり6ペンスでトーカーを見たりしている。

(b) ビリーの学校と娯楽

ビリーの兄弟姉妹は、イングランド国教会系の小学校とカトリック系の小学校の間で行ったり来り転校して学んだ。どちらの小学校でも担任が交替制で、あらゆることを少しずつ教えたが、ビリーにとっては教育効果がほとんど残らないようなものであった。ビリーは5歳になる前に入学して13歳で卒業した。しかし卒業するまで教科書を買った記憶も、教科書を家に持ち帰った記憶もない。先生が黒板に書いたものを、自分の石盤に書いて学習した。文字は祖母から、算数は姉から教えられた。学問の重要性を教えてくれたのも祖母であった。ビリーは、「学校は工場に入るまで私たちを入れておく囲いだっただの。教師は一人として学ぶことの楽しさや教育の大切さを教えてくれなかった。……いまこうして小学校教育を思い出そうとしてみて、正式の教育についての思い出が、あまりに少ないことに驚く」と述懐している。

それは学校教育のせいでも教師のせいでもなかったのかもしれない。ビリーは小学校に入ると、11時45分に先生が合図してくれるのを待って教室を飛び出し、工場の大きなストーヴの上で温めてある弁当を父母と2人の姉と兄の職場へとそれぞれ配達し、最後に母と一緒に自分の弁当を食べ終わると、走って学校に帰った。放課後には近所の店で使い走りのアルバイトをして小銭を稼いだ。10歳になると早朝の5時に起床して朝刊を配達し、遅刻寸前に登校して9時から11時まで教室でウトウトするか居眠りし、昼食時に家族に弁当を配達し、午後の授業も午前と同様に過ごし、4時には地方新聞の夕刊を配達し、それが終わると店の配達のアルバイトをした。ビリーにとって学校は「休息の場」にすぎなかったのである。このような生徒を抱えた教師に何ができたであろうか。生徒の「体力の消耗」を思いやって「親切にほっといて」やったとしても不思議ではない。13歳で通学をやめたとき、就職のための簡単な書類を書くことさえおぼつかなかっ

た。ビリーのそのような学校生活は、1ペニーでも多くを必要とした家計に起因したことも否めないが、父の教育観にも起因したであろう。彼の父は、子供が教育を利用してもっと社会的に上の地位に昇ることに価値を見いださなかった。そのために、彼の姉が11歳の児童が受ける国家試験で優秀な成績を収め、高等教育まで通じる別の教育コースであるグラマ・スクールに通学する奨学金を与えられることになっても、通学用の革靴を買えないという理由で、その特典を得させなかった。ビリーも小学校に在学中に両親から真剣に勉強しろと奨励された記憶はなかった。

都会には多くの娯楽があった。ウィリアムの父母は失業中でなければ、土曜日の夜にはパブで夜が更けて閉店するまで、仲間と談笑した。「パブは労働者がくつろげる数少ない場所の一つだった。……パブは荒涼たる人生を忘れさせてくれる場所であり、絶望と戦う唯一の武器だった。それは労働者がもっていたわずかな逃避の安全弁の一つだった。」両親はときには演芸場にも行った。ビリーは無声映画も見た。入場料は不明だが1ペニーより高かったことは確かだ。なぜならば、入場料がないときは1ペニー払って初老の紳士が倉庫で朗読する小説を聞いたからである。1920年代にトーキーが来ると、毎週土曜日の午後、子供は入場料の代わりにジャムの空き瓶二つを出して映画を見ることができた。演芸場の見世物は空き瓶では入場できなかったのも、非常階段をのぼってこっそり天上栈敷にもぐりこんだ。劇場では本式の演劇も鑑賞した。見世物や演芸や演劇を見るお金がないときは尻あげをした。子供仲間の遊びではフットボール、オハジキ、ピッチ・アンド・トスがあり、大人の遊びでは、多数のネズミと犬を戦わせる娯楽もあった。力自慢の男が日曜の午前には郊外の野原でレスリングをし、それを見物する娯楽もあった。少額の賭け金も集められた。伝書鳩を飼うのも当時この地方の労働者の男の趣味の一つであり、ビリーの父は20羽ぐらいの鳩を飼っていた。年に一度の伝書鳩のレースは、重要なイベントであった。鳩の卵は食用に供されたらしいが、鳩の肉を食べたかどうかは分からない。ビリーはそれについて一言も述べていない。さらに小面積の家庭菜園での園芸も、父にとって趣味と実益を兼ねた営みだったであろう。土曜日の夜には教会のホールで若者たちのためにダンス・パーティーが開かれた。

ビリーの幼年時代の最大の娯楽は1924年夏の海浜のリゾート都市ブラックプールへの一週間の家族旅行だった。有給休暇はなかったが、景気がよくて多少の蓄えがあったのだろう。日常生活を離れた夢のような一週間を過ごしたあとの木綿工業都市の空気は、鉛のように重かった。また、荷馬車に乗って田園に行く日帰りの郊外遠足もあった。誰が主催したのか分からないが、通りの住人が参加したその遠足はシャラバンと呼ばれている。

7. 伝記に述べられていて、統計には出てこない労働者の経済生活の側面

(a) 夫の賃金の管理

ウイニフレッドの父もビリー父も、金曜日にその週の賃金を受け取ると、それをそっくり妻に渡した。リーヴズ夫人によると、ロンドンの労働者の多くは、週給が20シリング以下の場合にはそっくり賃金を妻に渡し、20シリングを越えると、越えた分は手元に保留することが多かったらしい⁽¹⁷⁾。ブラックバーンでは、20シリングを越えても、夫がすべての給料を妻に渡す習慣だったのか、ビリーの父は例外だったのかは、分からない。ちなみにビリーの母はとくに家計のやり繰りが上手だったわけではなく、むしろ下手だった。それにもかかわらず、父が給料をそっくり母に渡したのであれば、それがブラックバーンの労働者の習慣だったのかもしれない。

(b) ウイニフレッドの家族について

ウイニフレッドの家族の収入で統計に現れないものとしては、すでに述べた山野の鳥獣の捕獲や燃料用の薪収集のほかに、食用植物の採集・加工があった。羊が体をこすりつけた柵にこびりついた羊の毛を集めて糸に紡ぎ、その糸で編まれるストッキングもあった。牧草地の境界に刈り残された牧草やトウモロコシ畑の収穫後の落ち穂を豚や鶏の餌のために集めることもあった。これらは非の打ち所のない余禄であったが、ときには正規とは言えない方法で物を得ることもあった。たとえばウイニフレッドの父は、雇用主の地主が友人を招いてキツネ狩りを行なったときに、茂みに潜む手負いのキツネを黙って頂戴し、母は、卵をよく産む種類の鶏の卵を数個、近隣の町の屋敷の庭からこっそり持ち出して自分の鶏に抱かせ、孵化して育つと、交配用の雄鶏1羽を残して売却した。ウイニフレッド自身も、隣町にある屋敷の塀を乗り越えて中にあった花の球根を盗んで家の周りに植えた。

(c) ビリーの家族とその周辺の人々について

ウッドラフの家族の生活とその周辺の人々の生活にも、統計に現れない経済生活の側面があった。たとえば、ブラックプールへ海水浴のために汽車で旅行したときに、15歳を頭とする4人の子供たちは無賃乗車をした。労働者階級の子供はそうするのが不文律だったと伝記にあるが、改札口を駆け抜けるように子供達に指示したのは父親だった。1926年頃にビリーの兄はビリーを使って夜中に食料品店に忍び込んで盗もうとし、ビリーが初めて就職した食料品店では、先輩の店員が常習的に商品を盗んで昼食とした。またビリーが手押し車に載せて配達する途中の商品を、デモ行進中の一団の労働者が略奪した。不景気が長引くと、金持ちの家の周囲の木の柵は少

しずつ持ち去られて燃料にされ、線路上に放置されたトロッコに積んであった石炭は一夜のうちになくなった。さらに不況のどん底で、一家全員が失業したときに、ビリーの母がビリーをつれて行楽地のブラックプールに行って何日間か春をひさいで過ごしたことも統計には現れない。それは暗黙のうちに労働者階級の間で承認されていた最後の手段だったのかもしれない。その後ビリーの母は流産した。

8. 階級意識

(a) ウィニフレッドの父

バジョットは、イギリス社会の安定性は、下の身分の者が上の身分の人を敬い聴き従うところの恭順な国民性によると考えた⁽¹⁸⁾。その傾向が、とりわけ19世紀後期から20世紀初期のイギリスの農業労働者に強く見られた、とニュービは述べている。彼によると、イギリスの農業労働者が上の階級を敬いそれに聴き従ったのは、恭順の見返りを期待したからだった⁽¹⁹⁾。なるほど1894年に生まれた農業労働者は1970年代に、自分が目上の階級を敬ったのは「彼らのおかげで暮らしていけるからだった」と言った⁽²⁰⁾。ウィニフレッドの母も「お金持ちは敬わなければならない。それは職をくださるからだ」と子供たちに言い聞かせた。彼らは日常生活の中で、労働者階級と上の身分の人たちとの相違を常に意識させられた。第一次世界大戦の祝勝会でさえ、上の身分の人たちの会と労働者たちの会とは別々に行なわれたのである。しかしその差別があっても、農業労働者は上の身分の人たちに対抗意識や敵対心を抱くことはなかった。もし敵対心が彼らの心であれば、ウィニフレッドの父が野原で貴族と出会ったとき、恭しく農場の柵の門を持ち上げでお通しし、チップをもらい、そのことを興奮して、家人に話すことはしなかったであろう。

(b) ビリーの父

このような態度は、ビリーの父には期待できないことだった。彼は不景気のどん底で、市の失業対策の臨時作業に雇われて、いやいや公園のヴィクトリア女王の銅像を洗った。女王の銅像洗いは特権階級を嫌う彼の信条に反することだった。それ以後、彼はその銅像のそばを通ることを避けたと、ビリーは書いている。ビリーは幼い時から、労働者たちが絶えず「やつら (them)」について口にするのを聞き、「やつら」は共通の敵として扱わなければならないことを知った。そして自分が下層階級である労働者階級に属し、「やつら」は上の身分だということを知ったと書いている。しかし上の身分の「やつら」が敵だったとしても、必ずしも労働者たちがその敵と戦わなければならないと考えていたわけではなかった。ビリーの父は「上層と中層の金持ちには、貧しい労働者のことはほっといてもらいたい」と思っていた。彼らの階級意識は「攻撃的では

なく防衛的だった」というマッキビンの言葉はあたっている⁽²¹⁾。ビリーの父も含めて、工場労働者の多くは労働組合に参加していたが、急進的ではなかった。1926年のゼネスト以後に、組合運動よりも政治運動を重視して、市議会と国会に議席を獲得しようとする動きが労働者のなかに生じたが、それは一般的ではなかった。1926年に工場労働者の一人が市議会議員選挙に立候補して、10歳のウィリアムも応援活動に参加した。この選挙で、労働者の大部分は雇い主である保守党の候補者に投票した。ブラックバーンでは「人々の忠誠心は、自分の所属する階級にばかりでなく、各自の工場や地域社会にも強く向けられていた」のであった。

(c) 両者に共通のこと

しかし工場労働者でも、もし自分の職場や地域社会に関する配慮なしで政党を選択できる立場にいれば、労働者階級の味方を選んだであろう。ウニフレッドの父は、保守党は金持ちの党で、労働者の味方は自由党だと考えて、いつも自由党に投票したとウニフレッドは述べた。とはいっても、その選択は、政治活動をする労働者にたいする直接の支持には向けられなかった。農業労働者のあいだでは、政治は支配階級にゆだねればよいという伝統的な意識をもつ者が多かった⁽²²⁾。そして政治的な野心があると見られた労働者は、仲間から疑いの目で見られ、嫌われたとさえ言われている⁽²³⁾。これは農業労働者に限られたことではなかった。ビリーは「労働者の心には、自分たちの仲間に責任をゆだねることにたいする抵抗があった」と述べている。

9. む す び

二つの伝記は、20世紀初期イギリスの農業労働者も地方工業都市の綿業労働者も、我々が想像していたより貧しい生活を送っていたことを示している。もちろんウニフレッドとビリーの家族の生活に、楽しみが全くないわけではなかった。ウニフレッドの周囲では、時には町のホテルの客のために二頭の犬に一匹のウサギを追わせて捕らえさせるウサギ追いがあったり、1910年の国王の戴冠式に村中こぞってお祭り騒ぎをしたこともあった。腕白時代のビリーは仲間とボタ山で遊び、夏休みには郊外の田野まで足を伸ばして、終日、遊び歩き、同じ街区の人がおとなも子供も一台の大きな荷馬車に乗って田園への遠足を楽しんだ。ビリーの父は、工場に隣接する空き地の小さな家庭菜園を工場から借り、そこに小屋を作って伝書鳩を飼い、花も栽培した。ある意味では、彼らは貧しいながらも、同時代の日本の下層階級の人々より生活の楽しみ方は達者だったかもしれない。それはそうだが、この二つの家族は、やはり世界に冠たる工業先進国イギリスの豊かさの中で、貧困のうちに取り残された生活を送っていた。長引く木綿工業の不況の中でビリーの祖母は食料不足のために衰弱死した。当時の下積みの子たちが「楽しむのはお金持ち、

苦しむのは貧乏人」というような歌を歌うように育ったのは無理もなかったとウドラフは述べている。

さらに下層の者に対する上の身分の者の冷淡な態度も想像以上のものである。たとえば、ウィンフレッドの周囲では、第一次世界大戦中に若い農場労働者が農場経営者に無断で陸軍に志願して退職することになったとき、農場経営者は怒って彼に最後の給料を渡さず、彼の父親を作男用の住宅から追い出そうとさえした。あるいはビリーの周囲では、労働者がクリスマス・イヴに解雇されたり、何十年と長期勤続した労働者への褒賞がシェリー酒1瓶だったりした。ビリーの父はその瓶を工場から持ち帰り、台所のテーブルに置いて家族全員でそれを眺めた後に、父がそれを裏通りの壁にたたきつけた。またストライキの最中だったが、女や子供も参加している労働者の平和的なデモ行進に、騎馬警官隊が襲いかかって指導者を警棒でなぐり殺すということもあった。

このような状況にあっても、イギリス労働者階級のあいだにマルクシズムも革命主義も普及しなかった。ホブズボームは、プロレタリア革命はマルクスの願望に基づく予言であり、マルクスは、プロレタリアを十分に知らず、また十分な分析もしていなかったと述べている⁽²⁴⁾。労働者階級の実像が、たぶんマルクスが考えていたものとは大きく違っていたであろうことは、この伝記を通して、我々は認識することができるのである。

《注》

- (1) E. C. Ramsbottom, 'The Course of Wage Rates in the United Kingdom', *Journal of the Royal Statistical Society* Vol. 98 (1935).
- (2) Peter Dewey, *War and Progress Britain 1914-1945*, Longman 1997, p. 43
- (3) W. A. Armstrong, "The Countryside", F. M. L. Thompson (ed.), *The Cambridge Social History of Britain 1750-1950* Volume 1 (Cambridge Univ. Press 1990), pp. 134 and 139.
- (4) London School of Economics and Political Science, *The New Survey of London Life & Labour* (P. S. King and Son 1928) p. 93.
- (5) Eric Hopkins, *A Social History of the English Working Classes 1815-1945* (Edward Arnold 1979), pp. 227-8.
- (6) James Caird, *English Agriculture in 1850-51* (1852) p. 84.
- (7) B. Seebom Rowntree and May Kendall, *How the Labourer Lives, A Study of the Rural Labour Problem* (1913. Reprint Edition Arno Press 1975) p. 24.
- (8) Sylvia Marlow, *Winifred: A Wiltshire Working Girl* (Ex Libris Press 1991)
徳岡孝夫訳『イギリスのある女中の生涯』(草思社 1994年)
William Woodruff, *Billy Boy, The Story of a Lancashire Weaver's Son* (1993)
原剛訳『社会史の証人—20世紀初期ランカシャの失われた世界—』(ミネルヴァ書房 1994年)
- (9) 1901 Census, England and Wales.
- (10) *Ibid.*
- (11) 1891 Census Enumerator's Book.

- (12) Michael Winstanley, "Voices from the Past: Rural Kent at the Close of an Era" in G. E. Mingay (ed.), *The Victorian Countryside*, (Routledge & Kegan Paul 1981) vol. 2, p. 629.
- (13) 生活費指数
- | | | | |
|-------|------|-------|-------|
| 1909年 | 59.8 | 1919年 | 140.8 |
| 1910年 | 60.9 | 1920年 | 170.9 |
| 1911年 | 62.0 | 1921年 | 126.8 |
| 平均 | 60.9 | | 146.1 |
- A. H. Halsey (ed.), *Trends in British Society since 1900*. p. 122.
- (14) S. G. & E. O. A. Checkland (eds.), *The Poor Law Report of 1834* (Pelican Classics 1974) pp. 90-91.
- (15) Rowntree and Kendall, *Ibid.*, p. 40.
- (16) Michael Winstanley, *op. cit.*, p. 630.
- (17) Mrs. Pember Reeves, *Family Life on A Pound A Week* (Fabian Tract No. 162, 1912) p. 8.
- (18) Walter Bagehot, *The English Constitution* (1867) (Fontana Edn. 1963) p. 248.
- (19) Howard Newby, *The Deferential Worker* (Penguin Education 1979), p. 51.
- (20) Michael Winstanley, *op. cit.*, 2 p. 634.
- (21) Ross McKibbin, "Why was there no Marxism in Great Britain?", *English Historical Review* (April 1984), p. 305.
- (22) Howard Newby, *op. cit.*, p. 108.
- (23) Ross McKibbin, *op. cit.*, p. 309.
- (24) Eric Hobsbawm, *On History* (Weidenfeld and Nicolson 1997) pp. 40-41.

《Summary》

Family Lives of Labourers in the Early Twentieth Century
England: Comparative Study of Urban and
Rural Lives through Two Biographies

By Tsuyoshi HARA

Quantitative informations on the conditions of the life of labourers can be given through averages and indices. But what they show are abstract and conceptually made up life of labourers. Here is made an attempt to gain more specific aspects of family lives of rural and urban labourers who lived at the lowest part of the agricultural and industrial society in England in the early twentieth century through two biographies: *Winifred: A Wiltshire Working Girl* by Sylvia Marlow (1991) and *Billy Boy, the Story of a Lancashire Weaver's Son* by William Woodruff (1993).

Comparison of family life is made between that of an agricultural labourer and that of a cotton factory weaver, in terms of income, expenditure, diet, dwelling, schooling and pleasure, and class consciousness. It is revealed that their lives either in the country or in the city were much poorer than we Japanese presume. But also it is shown that poor as they were, they may have known how to enjoy life better than the contemporary Japanese counterparts did.

The members of both of the families knew clearly that there were “them” and “us” in their society, but they were not inclined to upset “them” by violent revolution. Marx, as Eric Hobsbawm says, may not have known about what English proletariat really were.